

《シンポジウム III》

心臓核医学の歩む道

司会の言葉

佐々木 康 人 (東京大学医学部放射線科)

玉 木 長 良 (北海道大学医学部核医学講座)

近年新しい放射性医薬品の登場と共に機器の改良によって核医学検査が大きく変貌を遂げようとしている。この傾向は心臓核医学において最も顕著である。 ^{99m}Tc 標識血流製剤の登場でより鮮明な血流分布像が得られるだけでなく、心機能と血流分布の同時解析ができ、かつ急性期にも応用されようとしている。また ^{123}I 標識製剤の登場によって、これまでにない心筋局所のエネルギー代謝や交感神経機能などの評価が可能となった。さらには PET での血流や代謝の定量的解析のすばらしい成果に刺激されて、SPECT の吸収・散乱補正法が開発され、SPECT を用いた定量化もすすめられ、心筋血流量の定量的解析も検討されている。この数年の豊富な経験により、新しく開発された手法をどのような状況下で応用するのかに関する見解も定まりつつある。特に虚血の診断に限らず、治療方針決定やその効果判定、さらには予後も含めた病態解析など新しい領域で核医学の手法が応用されようとしている。

このように画像診断が進歩する一方で、膨大に

膨らんだ医療費を削減する政策も実施されようとしている。今後多種多様な検査法をどのような手順でいかに効率よく検査を進めていくのが経済効果が最も高いのかを注意深く検討する必要がある。この点で心臓核医学は大きな転換期にきているともいえる。ここで 21 世紀に向けた心臓核医学を展望するために、基礎と臨床の先生方や現場の技師の先生も交えた討論の場が必要と考えられる。

まず基礎的な立場からどの程度心臓核医学が進歩を遂げたかを述べていただく。また技術者からは心臓核医学検査で忙しい現場での意見を伺う。さらに臨床からはこれまで多種の検査を利用してきた成績を整理していただき、将来展望していただく。これらの発表を通して、基礎と臨床の意見を交換し、現状の問題点を把握し、今後様々な状況下でどのように核医学検査を活かすかを討論する。あわせて他の検査法や治療法との関連から最適な strategy (戦略) を模索する。このシンポジウムを通して今後心臓核医学の進むべき道が明らかになることを期待したい。